

## 令和5年度第1回京都市環境審議会 会議録

日 時 令和5年8月4日（金） 午後3時30分～午後4時40分

場 所 京都市役所本庁舎1階 環境政策局会議室（環境総務課執務室内）

※オンラインとのハイブリッド

出席者 大久保委員◆、岡本委員、小幡委員、川井委員、島田委員、白木委員◆、豊田委員◆、平岩委員◆、三ツ松委員、森委員、森本委員◆、山口委員、山田委員、山本委員、湯川委員、湯本委員、吉積委員◆、渡部委員◆（五十音順）

◆：オンライン出席

### 1 開会

善積環境政策局長から挨拶

### 2 議題

#### （1）会長の互選及び会長職務代理者の指名

- ・ 環境審議会会長は、委員の互選により、小幡委員に決定した。
- ・ 会長職務代理者は、小幡会長の指名により、大久保委員に決定した。

#### （2）部会の構成員及び部会長の指名

- ・ 部会の構成員は、事務局から示された案（資料4）のとおり、小幡会長の指名により決定した。
- ・ 小幡会長の指名により、環境基本計画評価検討部会の部会長は小幡会長が兼任、地球温暖化対策推進委員会の委員長は島田委員、生物多様性保全検討部会の部会長は湯本委員、京都環境賞選考部会の部会長は山本委員、環境保全基準部会の部会長は大久保委員に決定した。

#### （3）各部会の審議予定

- ・ 各部会の審議予定について、資料5～資料9に基づき、事務局から説明した。

#### （4）意見交換

小幡会長 各部会の審議予定に関することも含め、委員の皆様から御意見をいただきたい。

島田部会長 地球温暖化については、まさに沸騰するような暑さが常態化するような中、京都で取組を進めるに当たり課題が山積していると承知している。一方で、昨年11月に国が選定する脱炭素先行地域の計画に採択され、区域は限定しているが、2030年にCO<sub>2</sub>排出量正味ゼロにするという非常

にチャレンジングな目標に向けて市を挙げて推進されていくと承知している。さらにそれを市全体に横展開していくことは非常に大きな論点だと思っている。その観点から、ぜひ委員会で活発な議論を進めたい。

湯本部会長

生物多様性保全部会の昨年度の審議において、京都市生物多様性プラン2021～2030は、生物多様性国家戦略や昆明・モントリオール世界生物多様性枠組みと同じ方向性で進めていることを確認している。生物多様性は、生きものの大切さを理解し、生物多様性に配慮したライフスタイルへの転換や経済活動という社会変革が大事である。これを具体的に進めていくため、京都市の施策や企業、大学による生物多様性への配慮を評価する仕組みとして、評価指標や数値目標などについて検討しているところである。

また、世界中に160万種規模の生き物がいて、京都には何種類いるか知られていない。そういう既存データの取りまとめも非常に必要であり、4月に京都市・京都府共同で「きょうと生物多様性センター」を設置された。7月21日に京都府立京都学・歴彩館でキックオフのシンポジウムを開催し、来場が約360人、オンラインが約180人の方に参加いただいた。当日は、名誉センター長であり、総合地球環境学研究所所長の山極壽一の基調講演の後、各主体による様々な実践例を紹介していただき、パネルディスカッションを行った。また、同センターは左京区役所、京都府植物園、京都府立大学の一部を借りて、ミッション・機能を分散して取り組んでいるところである。

世界的な生物多様性の減少を可能な限り回復に向かわせることが一番大きなことであり、それを評価するのは京都市の生きものたちが生きていけるということである。これをモニタリングしていくため、同センターが何らかの働きができればと思っている。

また、新しい目標として2030年までに、陸域、海域総じて30%の保護区を作る30by30を日本政府も掲げている。今は陸域が20%程度、海域で15%程度であり、これまでの国立公園や自然公園では足りないため、会社が所有する森林や社寺林を自然共生サイトとして指定し、保護区を増やしていく取組がある。京都市や京都府においても、候補地はいくつかあり、その魅力を発信するなど支援していくことも、ミッションの1つだと感じている。

山本部会長

京都環境賞については、京都ならではの興味深い内容の応募が多数ある。昨年度についても、例年を上回る51件応募があった。京都環境賞の大賞に加えて、特別賞が7部門で11件、奨励賞が8件を決定した。大賞については、動画共有サイトを通じて生物多様性の保全に関する動画を

100本以上発信しておられる中学生が受賞し、特に若い世代、次世代を担うような若い方が熱心に活動していることを知っていただくといい機会になったと思っている。

今年度についても現在応募中で、令和5年8月31日まで応募を受け付けている。選考部会の審議においても、応募のあった活動について具体的な成果、将来性、先進性だけではなく、環境保全以外の副次的な効果の観点も含めて選考の基準として検討を行っている。

京都市だけでは、なかなか環境保全は進まないため、京都環境賞の実施を通じて、受賞者の活動を周知・啓発して京都市内の環境保全の活動を応援し、市民・事業者、NPOなど、京都市の構成員の皆様の環境に対する関心が高まることを期待している。

部会長として、部会での議論が円滑かつ活発になるように努めてまいりたい。

大久保部会長 環境保全基準部会は、いわゆる公害行政を担当しており、市民の健康、そして安全を確保することにより快適な環境を創造するという、いわば環境行政全般に共通した一丁目一番地というべきものであって、しっかりとその維持・前進を確保していく必要があると考えている。

最近の動向としては3つある。1つ目は、PFOS・PFOAのように新しい有害物質について、知見に応じた改善、基準の設定などを行っていただかなければならない領域が、依然として残っている状況である。

2つ目は、環境基準には健康項目、生活環境項目がある。従来、生活環境項目の中で水生生物基準等も設けられてきたが、それに加えて、大気分野にも有害物質の植物影響を、農産物も含めて基準設定する国が増えてきている。これらにどう対応していくか、国の動向を注視し、対応していく分野であると考えている。

また、身近なところでは、大気、水の状況について、市民の方々の快適環境を作っていく上で、3つ目として、DXへの対応も課題となっている。従来の常時監視についても、次第に各地で予算が削減される状況もあるが、測定業務がないと対策も打てないため、きちんと予算を確保していく。これは継続的に行うべきものであるため、維持していくとともに、DXを活用し、様々な環境情報を統合したプラットフォームとして市民の方々に提供し、リスクコミュニケーションを促進していくことも重要な課題であると考えている。

以上のことから、公害行政は地味な領域と見られがちであるが、基本となる領域であるため、しっかりと維持強化を図っていくことが必要と考えている。

小幡会長 環境基本計画評価検討部会について、従来の延長線上ではない形で、総合的かつ複合的にまとめていきたいと考えている。脱炭素や生物多様性、循環型社会については、各部会においてしっかり検討されると思う。それをまとめて環境基本計画として、相互連関を見ていくことが一つである。

もう一つは、他の地域においてとられているような目標や対策があるが、それとの整合性や、それを超えるような方向性を出して各部会に提言するなど、評価検討部会と各部会との相互にやりとりしたいと考えている。

成果物としては、進捗状況を評価した年次報告書を作り、分かりやすいものを各委員に共有したいと考えている。

吉積委員 京都市は世界的にも注目されている都市の一つと思うので、世界にも発信できるような環境政策の推進に協力していければと思う。

湯川委員 交通政策を専門に研究している。環境政策に関する報告を聞くと、考えの組み立て方や議論の仕方が違うと思ったので、私の持っている知見も発信しながら、様々な角度から意見交換できたらと思っている。

森本委員 生物多様性あるいはもう少し広い意味で自然を大事にしていく流れが世界的に起こっている。30 by 30だけでなく、30%自然再生の考え方がある。経済界においても、ベータ版で検討していたTNFD（自然資本に関する財務情報を開示するタスクフォース）が、この9月に正式版が出て、あらゆる事業が生物多様性というよりも、自然に対してどんなリスクやチャンスがあるかを開示しなければならず、ダイナミックに変わってきている。このような状況の中、環境政策とほかの分野との連携が重要になってくるように思う。特に、30 by 30、あるいは30%自然再生を考えてきたときに、今、国土交通省において、グリーンインフラの新しい推進プランが作られているところである。それから、新たな自然に対する都市の中の街区の自然状況を評価する制度を始めるための検討会が始まっている。中間報告においては、生物多様性と気候変動対応、人の暮らしのウェルビーイングの3つの指標で街区を評価するとされている。環境保全施策を進める中で、土木あるいは都市計画が大きく関わってくるところであるため、ぜひ、活動を連携することも視野に入れながら進めるのが良いと思っている。

環境省の自然共生サイト（OECDに登録するための国内の認証）の今年の審査委員長を拝命している。各地から非常に多様なボトムアップの動きがある。京都市においてもボトムアップの動きを民間に働きかける時期かと思っている。これが従来型のボランタリーな保全ではなく、企業の本務としての活動も含めることが課題になってくると思う。そのときに、生

物多様性センターに御活躍いただきたいと思っている。

大久保部会長　生物多様性、気候変動の様々な施策の組み合わせにおいて、京都は本当に面白い場所である。今、世界的にはバイオカルチャーと言い、地域の自然と生活、文化は切っても切り離せず、そのバランスを壊す生活をしてはならないことが、各地で認識されるようになってきている。

京都はまさにその最たるものであって、京都の環境をなしには京都の生活や歴史、文化は成り立たないという意味で様々な政策を統合していける。そして、それを国際発信していける場所だと思っているので、今後とも引き続き、よろしく願いしたい。

### 3 閉会